

バルティータ——思想的変奏の組曲、世界を切り分ける分界、  
そして新たな出発へのいざない。

クレオール文化論から群島論にいたるまで、言語・国家・領土・歴史といった近代の制度的規範を批判的に乗り越えながら思考し、接続的で包含的な世界ヴィジョンを探究し続けてきた今福龍太。その仕事は、脱領域、ボーダー、ディアスポラ、惑星思考、全世界、深い時といった理論的パラダイム、そして共創出や人新世をめぐる最新の思想的潮流と響き合いながらも、たえず具体的世界と物質的想像力に靈感を求めて、学問から詩へと、科学からアートへと果敢に越境を繰り返してきてきた。この旅人は、自己が森羅万象のなかに融解してゆく瞬間をとらえ、その界面において、あらゆる人と生命体と場所のあがる密やかな声を謙虚に聴きとろうとする。

「声は、それが響き渡るすべての場所を、自らとともに携えてゆく。声は同時に至る所にある」

（『群島 世界論』）

世界が生まれながらにして持つ可変的で即興的な「薄墨色の叡知」を、吟遊詩人の精神と手技によって書きとめ、歌い継いできた独創的な人類学者がいざなう思考の冒険。

Partita  
今福龍太コレクション  
「バルティータ」  
全5巻

## I クレオール主義

バルティータ

言語・国家・民族という自明の帰属意識から離れ、あらゆる時間・場所・声とひとしく交わること——。「混血」の理念、「意志的な移民」の倫理、「言語的越境」の決意とともに、「わたし」を世界に住まわせる新たな流儀が鮮やかに描き出される。初版刊行から四半世紀のあいだ読み継がれてきた、著者の思想の源流をなす著作にして、ポストコロニアル批評の極北にたつ金字塔。新たに補遺2編を加え、図版を大幅に刷新した完全版。

## II 群島—世界論

バルティータII

「世界」を「群島」として再創造する——。このヴィジョンを羅針盤とし、「全世界」の島々にも息吹く「ことば」「文化」「記憶」と出遭うための航海におもむくこと。近代世界を支配する大陸的な原理から離れ、一元化された歴史と地理によって囲い込まれた時と場所を解き放ちながら、「海」と「群島」のヴィジョンによって世界をあらたに認識し、接続するための方法論の更新をめざした著者のはるかなる思想的到達点。「群島—世界」なる未知の水平線をめざす、謎を孕んだ冒険的大著。

## III 隠すことの叡知

バルティータIII

「思想」と「方法」と「振る舞い」の源泉としての「人類学」——。それは形式的な学問分野を超える、私たちの知のエッセンスそのものである。本書は、これまでの著者の数ある論考のなかから、「文化人類学」の傍らにおいて書かれたものを集成。初期の瑞々しい論考から単行本未収録の貴重な論文、そしてトリックスター人類学者II山口昌男への機知あふれるオマージュにいたるまで、著者の独創的な「人類学的思考」のエッセンスを凝縮した新アンソロジー。隠された知の復権に向けて。

## IV ボーダー・クロニクルズ

バルティータIV

「越境者たちのアメリカ」はいまだに未知のアメリカである。この陰翳に富んだアメリカの出現をよそに、アメリカ国家はいま何を真に抑圧しようとしているのだろうか？ 異邦で不意に訪れるいまを描き出す軽やかな「日誌」。国境地帯を車で飛ばす旅人の移ろう視線が物語の一人称の「小説」。そして、バラ色の砂漠の民が奏でる音楽に目覚めた人類学者が記す鮮烈な「民族誌」。読み手によってさまざまな表情を見せる傑作紀行『移り住む魂たち』を改題し、著者最新の「夢のアメリカ日誌」を付す。

## V ないものがある世界

バルティータV

深い「喪失」の陰に覆われた都会で、「進歩」しつづけていくことに疑いを抱かない世界の無意識に批判的なまなざしを向ける「わたし」。人間が本来もつ原初的なことばや振る舞いが生き生きと現前する精霊たちの島で、生命の根源を辿り直そうとする無垢の少年「ノア」。「ない」ことと「ある」ことのはざまで、二人の異なった時間と場所の物語がパラレルに展開しつづもいつしか一つの大きな物語として融合し、昇華していく——。批評と創作の境界線上で生まれた、父と母と子供たちのための、少し哀しく、希望あふれる未来の寓話。

